

邇摩高ホームページ
http://www.shimanet.ed.jp/nima/

邇摩高Eメール
nima-01@shimanet.ed.jp

会報

松 風

発行所
島根県立邇摩高等学校
松 風 会

〒699-2301
島根県大田市仁摩町仁万907
TEL 0854-88-2220
FAX 0854-88-4417

ピンチヒッター

松風会会長

原 勝 正



私は平成20年4月から、財団法人「仁摩サンドミュージアム」の運営にピンチヒッターとして係わっており、邇摩高校の生徒諸君にも花時計の管理や運営方針に若者としてのアドバイス、又、ミュージアム案内の臨時アルバイト等々、深く御協力を頂いております。

このミュージアムは、平成3年3月に開館されました。平成20年6月には150万人の入館者を達成し、竹腰市長をお招きして記念式典を行いました。

芦原妃名子さんの漫画「砂時計」に夢中になった仁摩小学校の生徒が、彼女の父親を通して、ミュージアムを全国に紹介してもらえないかと相談され

邇摩高校の近況報告

校長 梶 瀬 龍 司



原勝正松風会長様をはじめ会員の皆様には、日頃より本校教育の充実、発展のために多大なるご尽力を頂いておりますことを深く感謝申し上げます。

景山博恭前校長が松江農林高校に転勤なさいました後を受けて、松江東高校より転任してまいりましたが、もとより浅学非才の身であります、微力を尽くす所存でありますのでどうかよろしくお願いたします。

さて、本校が平成7年度に総合学科に生まれ変わって14年が過ぎました。1万6千3百余名の卒業生を輩出する

で発表されました。大田市はもとより島根県各地、又、中国地方にも与えた影響は大変大きく、皆さんもテレビ・新聞等ですでに御存知の通りであります。

「益田、グラントワ」「浜田・江津、アクアス」「温泉津温泉」「仁摩、サンドミュージアム」「大田、石見銀山」「大社、歴史博物館」「玉造温泉」「松江観光圏域」と夫々が点であった観光地が系統的に一本の線で結ばれました。

さて、これまでに紹介しましたことは、光のあたる部分であります、影となつてゐる部分も多くありますが、影めません。ミュージアム建造後18年の経過は、「メンテナン」や「次から次へと目まぐるしく変化する観光ニーズ志向の捉え方」「指定管理団体としての独立性」等々、難問を抱えることになりました。これらの諸問題に取組む姿勢はどうあるべきか、これからは、今迄よりもっと地域の皆さんや行政担当の方々の意見を幅広く丁寧に聞いて

徒が急増していること、この地区には養護学校高等部がなく遠距離通学を強いられる生徒が多いことから、対策を検討された結果です。本校の生徒にとつても、これまで以上に相手の立場に立つた行動、思いやりの心が必要になりましたが、人間としての成長を促す教育環境ができると思っています。

部活動の面では、野球部が9月の島根県高校野球秋季大会において、みごと優勝を成し遂げました。秋季大会優勝は平成4年以来16年ぶりの快挙であり、秋季中国大会でも1回戦を勝ち、準々決勝で敗れましたがベスト8になりました。県大会で優勝したその日に、仁万駅前にて野球部後援会のお世話で優勝報告会を開いて頂きました。多くの町民の皆様に出迎えを受け、祝福され、皆様方に支えられて活動していることを本当にありがたく思います。

判断することが必要となるでしょう。

平成20年12月31日の大晦日は、例年通りの「時の祭典」が執り行われました。夕方から大雪の大荒れの天気も時間が経つにつれ収まり、天気は回復してまいりました。飯南社中の神楽、400食分のふるまい「ぜんざい」と「年越しソバ」、108人の年男・年女による砂時計反転の綱引き、カウントダウンコールと共に12時きっかりの花火打ち上げ。冷え冷えした満天の星空の元で、約5千人観光客は咲き乱れる花火の美しさに酔いしたことでしよう。

私はこの度、ミュージアムのピンチヒッターとして運営を任せましたが、この仁摩サンドミュージアムの建造に携わってこれ、18年間営々と運営してこられた諸先輩の御尽力に深い敬意の念を抱きました。そして、これからの地域の発展をにらみながらメンテナンを含めた色々な問題を的確に処理して、後世に残されることを望んでおります。

また、文科系の部活動もがんばっています。吹奏楽部は、全日本吹奏楽コンクール島根大会、小編成の部において、最優秀賞金賞を受賞し、中国大会に出場しました。大田市民会館で行われた県大会で、本校発表曲「元禄」を聞き終えたときには、少人数編成ながらその力強さと音の調和に身震いを感じたほどでした。その他、農業クラブ全国大会には、県の代表として農業鑑定競技に2名が出場するなど、他の部活動でも邇摩高校の意気を内外に見せてきています。

少子化や格差が進行する中、これからの時代を逞しく生き抜いていく人間を育成しなければならぬと思っております。松風会会員の皆様方には今後とも変わらぬご支援とご厚情をどうぞよろしくお願い申し上げます。

特集 卒業生からのたより

農機販売に賭けた

六十年より

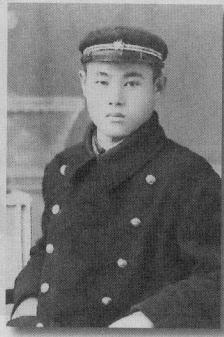
本藤 琢磨(79)

○倉敷河上農機会長

○江津市敬川出身、岡山県在住

○昭和23年仁万農林学校卒業

○著書「農機販売に賭けた六十年」



昭和20年島根県立仁万農林学校に入学した。私の最終学歴である。当時、石見地方では名門の旧制浜田中学校があったが、村で4番以内の成績でないと入れなかった。地元には江津工業があったが戦時で夜間部に変っていた。商業校はなく、3つの農林学校があった。同じ位な距離で西に行ったところに益田農林、三江線で南に行ったところに川本農林、山陰本線を東に行ったところに仁万農林学校があった。後で解ったことで仁万農林は甲種であり、当時差別化して

いたようだ。

村から4名受験し入学した。新築間もない時で校庭には訓練用のグライダーがあった。ルーズベルト、チャーチルの藁人形が立っていた。軍事訓練も行われた。校庭はクローバーで、転んでも汚れることはなかった。

戦中、戦後は食料の増産で国民は一生懸命だった。農産物は貴重なものだった。

当時を振り返ってみると農林学校は花形だったようだ。通学で大田中学の生徒と一緒に引けをとめることはなかった。終戦までの4ヶ月間に軍動員に2回、昭和18年の大水害の田圃の復旧作業に2回出動する。通学用に地下足袋が一足しかなく冬期に備え8月に1週間わらしをはいて通学した。終戦と同時にゲートルから下駄に変わった。

8月に体力検定試験を受けた。初級である。100米14秒以内、1万米マラソン、鉄棒懸垂7回以上、砲丸投げ。水泳は100米。仁万港でシケの日だった。悪戦苦闘、死にものぐるいだった。泳ぎ切った。俵(60kg)をかついで10米運ぶ。これは始めから失格である。上級

生に殴られ通しの1年間でハードなことが多かった。でも、3年間の学園生活は充実していたと思う。想い出は多い。

昭和23年学制改革で高校に昇格。もう1年延長就学したら卒業証書がもう1通もらえる。3年間担任だった名古屋出身の小塩先生が進学をすすめる。「お前は生物(植物)とか日記をよく記録する。今市(出雲市)の師範学校へ進め」と云われる。教師になるとしゃべらなくてはいいけない。苦手だった。健康優先で勉強は本気でなく、第一我が家の経済が許さなかった。

昭和23年1月、小母さん(河上商会の創業者の奥さん)が実家に帰り、私に「3月に卒業するのなら倉敷で使つてやるので、おいで。来年なら要らない」と云う。就職難もあったが、我が家は経済的に楽でなかったの食いぶち減らしに倉敷行きを決断する。倉敷の創業者の家に10年住み込みで家族同様の世話になり、礼儀作法から商道に至るまで薫陶を受ける。60年間一貫して同じところでの勤務である。農家の長男としてこのような商売の道へ進む運命になろうとは。(農機販売に賭けた六十年より)

思い出多い

邇摩高の庭に立って

廣瀬 利男(74)

○牧師

○仁摩町出身、兵庫県在住

○昭和28年邇摩高校卒

○著書「ビートたけしと宗教」



今年の夏、家内と一緒に久し振りに思い出旅行で仁万に帰った。湯迫温泉に二泊して朝早く静かな町の思ひ出深い場所を写真に収めて歩いた。一昨年「ビートたけしと宗教」という本を出版したときに東京の聖学院高校の校長をしている友人が書評を書いてくれた。

その中に「この作品は、きつと多くの若者に改めて自分を見つめ直す絶好の機会になるのではないかと思います」とあった。この機会に母校の図書にも加えていただこうと申し出たところ快諾していただけた。私が邇摩高校に入学したのは、戦後間もない時で、仁万中から進学したのは十数人であった。父は画家で戦争のために京都から疎開をしてきていたのだから赤貧であった。当時、女の子は紡績工場に行くか、男の子

は漁師が左官になった。私も友達の親父に漁師になれと勧められた。私は、父に、高校に進学したいと言ったら、お金は出せないが行つてもいいと言ふのである。入学経費は払つてくれた。私は、「月謝」が要るという認識の無いま入学した。

初めてのクラスで、理由は分からないが受け持ちの近藤先生が私に級長を命じられた。一番背の低い私が、一番後ろに座らされて「起立、礼」と号令をかけるように言われるのである。得意になっていた。一学期が終わる頃、事務室の前に張り紙がしてある。月謝滞納者の掲示である。

その時、父がお金は出せない。と言う意味が解った。当時はアルバイトをする位なら働く時代であり、高校生が働く場は無かった。私は、築港に行つて力仕事をさせてもらった。朝早くパン屋で働き、パンを箱に入れて学校に持つて行き、同級生に買つて貰った。購買部もなかったの

でよく売れた。このような中でも一年でバスケット部に入り楽しんだ。選択科目で音楽を選んだ。音楽の先生と気があつてクラブ活動に音楽部が無いので作ろうということになり作った。最初の発表の曲は「美しく青きドナウ」である。数年前にオーストリアに行きドナウにたたずみ、シェンブルン宮のオレンジルームで青きドナウの演奏を聴いた時、邇摩高の思い出が走馬灯のように脳裏を駆け巡った。音楽の龍末先生は真宗の僧侶であった。国語も物理も英語

も殆どの先生が僧侶や神主であつた。授業に熱心で、温かみのある先生達であつた。数学が苦手であつたが親切に教えてくださった土岐先生を慕つていた。3年のとき松江高に転勤されることになって、世話をするから島根大学に行かないかと言つてくださった。何故か東京に憧れて、何とか東京に出て働きながら大学に行き、人生を考えるようになった。人や社会の幸せは政治にあると思うようになる。丁度そのころ造船疑獄が起る。政治を動かすのは人であり、人を動かすのは人の心であると思ふようになる。聖書の言葉に出会ひ、神の心で生きる道を人に分かち合う目標を見出してキリスト教の牧師の道に進むことになった。それは「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く」道であり富や地位とは縁はないが、心豊かな充実した日々である。

時代の荒波を 「遼摩高丸」は乗り切つた

山崎 勝宏 (69)

○大田市在住
○昭和33年遼摩高校卒
○山崎組社長
○遼摩高校創立100周年事業
「第2グラウンド整備事業」に尽力

私たちは昨年10月に、古希の同窓会を温泉津の旅館「後楽」で行ひ、普通科・商業科・農業科、合わせて全国から53名が出席し、恩師3

名も老躯を押して駆けつけていただき、嬉しい限りでした。

宴会に先立つて、すでに故人となられた仲間17名の追悼法要を近くの西楽寺の本堂を借りて、同期の僧侶織田惣平君が導師で、厳粛に勤めることができました。世間の例では、同窓会に故人となつた仲間の追悼法要を行うことは聞きませんが、参加者はそれぞれ歩んできた人生を深く思い見つめる契機になったと、故人の思い出を懐かしく偲んだようです。

翌日は、希望者16人がマイクパスで秋の石見路を散策することになり、まず母校を訪問しました。授業中ではありましたが、遼摩高OBの大島先生、坂根先生の案内で校内の新しい研究室や総合学科の諸施設を見学させていただいて、母校の着実な発展を実感しました。



深刻な少子化が学校の存続を脅かしている。昨今、遼摩高校を引き継いでこれら多くの関係者の母校愛とその労苦に心服の

敬意を表するものです。

個々の生徒の「生きる力と学ぶ意欲」が地域を活性化させる。それが伝統の生命で

しょう。それはまた、卒業生の大きな誇りであります。

私たちは、その後石見銀座遺跡に向かい、世界遺産を見学して夕刻、またの再会を期して解散しました。

遼摩高校と私

加藤(大平)正子 (49)

○訪問看護師
○大田市出身、愛知県在住
○昭和53年遼摩高校卒
○著書「野に咲く花のように」



高校を卒業して島根を離れ、30年が過ぎました。通学列車として



数回編成で走っていた列車はいつの頃からか「ワンマン」に変っていました。「仁万駅」と車内放送が流れると、田園に増改築された校舎が車窓に見え隠れしてきます。在学中の校舎は、歴史を感じさせる重厚な木造校舎でした。廊下や階段は歩くときしみ、床に塗られた油の臭いが校内を漂っていました。また、教室で係数表にそろばんをはじく音とは対照的に、窓の外を農業科で飼育されていた牛が時折声をあげ綱に引かれて歩いていったようすを昨日のこのように思い出されます。

私事になりますが、昨年の春長男は高校を卒業し浜松で漁師見習いとして働き始めました。時々会う息子からは自然相手の仕事の厳しさを通して、たくましさを感じられるようになりました。そして、三男は酪農志望で農業系の高校に進学し、名古屋の都心から1時間半かけて通学しています。子育てを通して、私自身の歩いてきた時代が重なり合います。自己嫌悪感を抱きながら入学した私はプラスバンド部に入部。部員は少なく野球部の応援や全校集会での校歌の伴奏と活動は限られていました。2年の春、故足立文夫先生が新任の教師として着任され、部の顧問をして下さることになりました。先生は精力的に停滞していた部の活性化のために力を注いで下さり、徐々に部員数も増え、文化祭の舞

台で演奏できるまでに私達を導いて下さいました。また、先生との出会いによって、力を合わせて一つの目標を成し遂げるという達成感を味わうことができ、卑屈になつていた私の心は、少しずつ解きほぐされていきました。それは「夢に向かつてすすむ」ということを改めて教えていただいた恩師との出会いでもありました。人生の中で、人との出会いは毎日のようにあり、人はその中で喜怒哀楽を分かち合いながら育っていくものだと思います。

今、私は遠回りの道のりではありましたが、正看護師の資格を取り訪問看護師として働いています。医療、介護の現場の厳しさがニュースや新聞等で報道されない日のない今日の社会情勢ですが、生と死に向き合う命の営みは日々の暮らしの中にあります。私はこの仕事を選んだことに誇りを持って働き続けて行きたいと思ひます。松風会の会報では、毎年数名の方が医療・介護の道を志して卒業されているとのこと、皆様のご活躍と遼摩高校松風会のこれからの発展をお祈りいたします。

最後になりましたが、自分史を出版し、また改めてここに青春の時を振り返る機会を下さった松風会事務局の皆様にお礼を申し上げます。

世界遺産石見銀山遺跡

「轆ヶ浦道を走破して」

その2

遼摩高校教諭 坂根 一則 (47年卒)

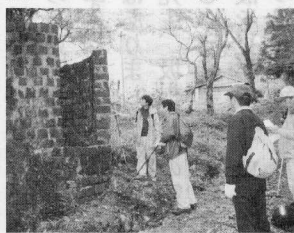
会報松風第39号に続き、世界遺産石見銀山遺跡見学その2をお届けします。「次は轆ヶ浦道走破だ。」



轆ヶ浦駐車場

遼摩高校石見銀山を歩く会の20年度の目標であった。平成20年11月22日、午前8時に有志6名は馬路の轆ヶ浦駐車場に集合した。この2週間は雨天が続く、前日も雨であったため心配したが、晴れ間がのぞく天気となった。石見銀山公園まで1台の車で移送していただき、リュックを背、杖を片手に8時30分にスタートを切った。歩きなれた銀山遊歩道を進む。山中のマイナスイオンが心地よい。途中、仙の茶屋横に湯里の西田集落でしか見られない「ヨズクハデ」が作られている。風情があつて心がなごむ。清水谷の清水寺の近くから右に折れ山吹城登山口へ、記念写真を撮り終え山道を登る。休役所跡を過ぎ山吹城への道と大田柑子谷との交差点に、榎瀬校長は、山吹城に登山してから轆ヶ浦へ行きたい意向であつたが、700段を超える急

階段の苦しさを知るメンバーは、流石に拒否した。ここから右の道へは全員初めてで、どんなことが起こるのか想像もできない。急斜面の山道を滑りながら下つていった。途中イノシシの悪さの跡がたぐさん見つかる。マーキングである。交差点を下り25分経過、旧鉾夫住宅前を通る。皆が空き家と思つてい



永久鉾山跡

たが、畑仕事に励むおぼさんを見つけて人家であることを確認する。住宅を過ぎると永久鉾山跡が見えてきた。煙道や選鉱場などの構造物が残っている。説明版の写真を見ると大きな建物が林立していたことが理解できた。この近くに永久坑道跡があり、仙ノ山まで千八百メートルの坑道が掘られているが、昭和18年の山陰大水害で水没した。私の知人で元大田市役所職員は、この坑道内に入ったことがあり「この坑道のスケールが石見銀山で一番すごいと思う、大久保間歩より上だ。」と言つて



上野地区

上でドリンクタイムの休憩。道の上方からおぼさんが降りてこられ、声をかけた。「こんに

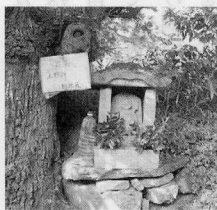


岡ノ段の観音堂



横畑の題目塔

いた。閉鎖されていて真偽が分からず大変残念である。永久鉾山から橋を渡り舗装道路を川沿いに進み、柑子谷入り口に到着した。「妙法連華経法界」と刻まれた横畑の題目塔を見つめる。上野・大田・柑子谷地域に至る交通の要地で、口番所があつた場所である。その高手に「岡ノ段の観音堂」があり、福光石製の観音様が納められている。そこから下方を見ると水車小屋があり、手造りそばの食堂がある。時計をみると丁度10時、営業時間ではないので店は閉まつていた。舗装された道に歩を進めること5分、轆ヶ浦方面の標識が山の方向を示している。また険しい山道が待っていた。歩き始めて3時間が過ぎた。11時30分、上野地区の舗装された道路

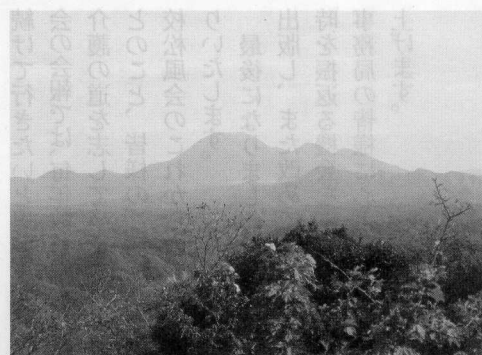


胴地藏



山吹城跡

ちは、轆ヶ浦道を歩いています。たくさんの方が歩かれますか」「いや、あまり見ないね」「あと少しです。頑張ってください。」などと会話し舗装道路を登る。左側の景色がすごい。あれが山吹城、あれが矢滝城と遠方の山を指差す。この上野地区は標高の高い位置にあり、鉾山関係者で栄え「上野千軒」と言われた場所である。道路沿いに大きなしいの木があり、その根元に「胴地藏」が祀られていた。銀鉾石を盗んだ者が役人に首をはねられ、哀れんだ村人が胴を埋めて弔つたと伝えられている。霊の存在を信じる方ではないが、背すじに寒さを感じる場所であつた。上野集落には、石垣の上に大きな屋敷が現存しており、鉾山事業で財をなした旧家と考えられている。舗装された道を三叉路の左に進むと「銀山街道轆ヶ浦5.5キロ」の標識である。松が段の地道に入る。竹やぶや坂道や池を見ながら薄暗い山道を登る。イノシシの痕跡を随所で見つける。20分後舗装道路に出た。口屋峠を目指し歩く。途中、「宝きよう印塔」がある。戦国時代、尼子と毛利の戦いで戦死者を弔うために、上野の旧家である田平家が寄進したといわれている。更に進むと右手に大きな「人切岩」がある。伝説の岩を過ぎ5分、「口屋峠」に到着。乗用車が2台見学を終え帰ろうとしていた。ここからの眺望は素晴らしく、出雲、日御碕、三瓶山がきれいに見える。「わざわざ景色を見にくるマニアがいる」と感心する。ここで昼食休憩、12時に30分前であるが、おにぎりをほおぼる。一休みの後、近くの石に刻まれた「祓い井戸」を見学し、舗装道路を下る。途中波の音が聞こえてきてゴールは近いと声が出る。「楽な道のりであつた」と軽口が出た。ところが、ここからが大変な道が続いた。11時50分「轆ヶ浦」の標識が目に入る。また山道に突入である。険しい道が続く。竹に取り



口屋峠から三瓶山を望む

平成20年度 卒業予定者 進路希望・決定状況 (平成21年2月1日現在)

1. 進路希望状況

	男	女	計
卒業予定者数	49	69	118
(1) 進学希望数	23	36	59
(2) 就職希望数	26	36	62
そのうち就職進学希望数	0	3	3
そのうち縁故就職数	1	0	1
(3) その他	0	0	0

2. 就職状況

①求人票 (枚)

県内	90	64社
県外	431	280社
合計	521	344社

就職内定者 事業所 60名 (男子25・女子35)

※公務員(島根県警察事務)1名内定

②就業地域 (内定者のみ)

県内				県外			
地域	男	女	計	地域	男	女	計
松江	0	0	0	中国	1	2	3
出雲斐川	3	5	8	四国	1	0	1
大田	10	17	27	関西	2	7	9
江津浜田	4	3	7	東海	3	1	4
縁故(大田)	1	0	1	関東	0	0	0
計	18	25	43	計	7	10	17
県内比率	71.7%			県外比率	28.3%		

*「県内」は勤務予定地を示す
*「県外」は本社所在地を示す

③事業所就職内定率

	県内	県外	計
男	100.0%	100.0%	100.0%
女	96.2%	100.0%	97.2%
計	97.7%	100.0%	98.4%

④就業職種

	県内			県外		
	男	女	計	男	女	計
専門・技術・管理	1	6	7	0	1	1
事 務	0	1	1	0	0	0
営業・販売	3	2	5	0	4	4
サービス	0	2	2	1	3	4
技能工	12	14	26	6	2	8
その他	2	0	2	0	0	0
計	18	25	43	7	10	17

3. 進学状況

進学希望者 59名(男子23・女子36(3)) うち3名は就職進学者

①進学希望先

	男	女	計	比率
大学	8	1	9	15.3%
短大	3	12	15	25.4%
専門学校	12	21 (3)	33 (3)	59.3%
高看	0	2	2	3.4%
決定者数	17	28 (2)	45 (2)	
希望者数	23	36 (3)	59 (3)	
決定率	74%	77.8%	76.3%	

※専門学校には、高等技術校・農業大学校・准看護学校等を含む

②進学地域 *県内進学比率 40.7% *県外進学比率 59.3%

	大学	短大	専門学校	高看	計
県内	2	3	17 (1)	2	24 (1)
鳥取		1			1
広島	3	4	5		12
山口					0
岡山	1	4			5
兵庫			4		4
大阪	2	2	5 (2)		9 (2)
奈良			1		1
京都		1			1
愛知	1				1
東京			1		1
計	9	15	33 (3)	2	59 (3)

付けられたピンクのビニールテープを目安に、歩け歩けである。下り坂が30分程続いたためか膝がガクガクしてき
「苦しい、まだか。」と脚を進める。やがて、琴ヶ浜が見えるところまで来た。カメラを片手に浜を撮影する。「もうすぐだ。」最後の頑張りと思いい歩を進めると道が途絶えた。しかし、ピンクのテープは誘導している。崖を滑り落ちるよう

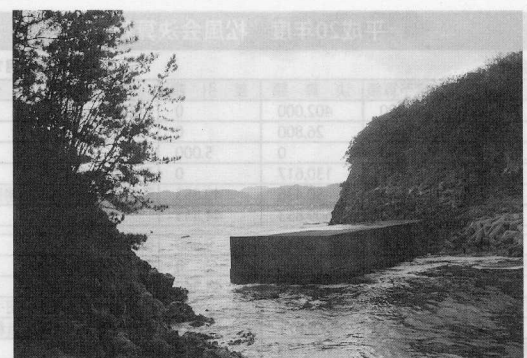
ピンクのビニールテープ

クガクしてき
た。潮騒は聞こえるがなかなかゴールに到着しない。

ケ浦へ。山陰本線を横断し、踏切横の「才の神地蔵」を見た後、民家横を通り海沿いの道路に出た。日本海の心地よい潮風が迎えてくれた。ここで記念写真撮影。満足

琴ヶ浜を望む

した顔、疲れた顔、それぞれであった。重い足取りで駐車場へと向かった。「お疲れ様でした。」と面々。銀の最初の積み出し港、琴ヶ浦のウオーキング、江戸時代の旅人気分を満喫した、厳しい往路4時間であった。走破して分かったことは、「7.5キロの行程の内、牛馬で銀鉱石を運んだ距離はわずかである。荷車の運搬は不可能で、大半は人が背負って交代制で運搬したと考えられる。」これが約30年続いた。やがて、銀山街道が温泉津沖泊り道13.5キロに移行したのは、「難所の少ない道程で、更には疲れを癒す温泉に入れたた



琴ヶ浦

め。」と推測できる。「百聞は一見にしかず」この諺どおりの石見銀



琴ヶ浦港

山遺跡、琴ヶ道走破であった。次の目標は明確で「銀山街道温泉津沖泊道走破」である。知人の元市役所職員は、「矢滝城が最高でこれを知らずして石見銀山は語れない。」と登山を推薦する。いずれにしても世界遺産石見銀山遺跡は見所が多く最高である。

中国大会

目に見えない力

野球部監督 岡本 曜

秋季大会は瀬摩高校にとって16年ぶりの優勝を飾ることができました。選手全員が必死にプレーして勝ち取った栄冠を、私は嬉しく、誇りに思います。

このチームには飛び抜けて能力の高い選手はいません。大会までの練習試合は負け越していました。ですから今になっても、どうして勝てたのか不思議な感じがします。ただ、この大会期間中、勝ち上がるごとに選手・チームが成長していたのは確かでした。その結果、辿り着いたのが優勝だったと思います。

新チーム結成時から、選手も個人の力の未熟さを自覚していたので、自分のプレーやゲーム運びに自信がありませんでした。しかし、試合を重ねる毎に主将を中心に、「全員で力を合わせ、お互いに助け合って戦うしかない」という気持ちが生まれました。そのような経過の中で、私がある毎に選手に伝えたのは「最後のかげ算」が大切だということでした。

チーム力
(個々の能力+個々の能力+……)×α

最後のαの部分には精神的なものが当てはまります。まず、「気迫」「闘志」「執念」「集中力」など、個人で出さないといけないものです。これはチーム内で気持ちの温度差が出ないように、「練習中から常に全員で大声を出すこと」「気迫を前面に出した

態度をとること」を徹底しました。

さらに、「仲間を信頼する」「チームのためにプレーする」「ミスをカバーし合う」などチームワークを含みます。そういった目に見えないものを選手は信じて戦い、持てる力以上のものを发挥出てくれました。その姿勢が球運と呼ばれる「ツキ」の要素をかなり引き込んだのだと思います。

初戦から決勝戦まで全て、相手の力が上だったので、厳しい戦いが続きました。強い相手に勝つためには「玉砕戦法」しかないと言いつつも倒れてしまうほど集中し、全力を尽くして相手に立ち向かうというやり方。選手は、どの試合も死に物狂いで戦い、帰りのバスは勝利の余韻に浸ることもなく、全員疲れ果てて眠っていました。

1点差勝利が4試合。逆転勝利が3試合。延長13回も経験しました。一球で流れが大きく変わってしまう緊迫したゲームが続きました。再三のピンチを全員で粘りに粘って守り抜き、ほんの僅かなチャンスをものしにしました。苦しみの連続を切り抜ける度に選手が成長していきました。すると、準決勝あたりから良い意味での「余裕」さえ感じられるようになりました。



それは、自分たちのやり方で勝てたという「自信」から生まれてきたものだと思っています。中国



大会の初戦は県大会のような戦い方ができ、勝利を収めることができました。しかし、2回戦では、大敗してしまいました。「力不足」ということは否めませんが、いつもより選手の元気が無く、「瀬摩高らしさ」を出せずに終わってしまったという感じでした。私の未熟さ故、監督として選手の体調・精神状態を良い方向に持って行けなかったことが悔やまれます。やはり、中国大会という独特の雰囲気や緊張感、知らない土地での連泊、タイムスケジュールに沿った行動等、不慣れな環境でのコンディショニングは難しいと実感しました。この秋は本当に多くの素晴らしい経験を積ませていただきました。その際には、多くの方々にお世話になりました。本当にありがとうございます。

もう少しでシーズンインしますが、冬季トレーニングで選手は心身ともに一まわり大きくなりました。春・夏の大会とも大会優勝旗を狙っています。

全国大会

農業クラブ全国大会に出場して

石川 建

農業鑑定競技の島根県大会に向けて一生懸命勉強してきました。色々な分野があり、分からなくて苦労することも沢山ありましたが、先生の指導があり頑張ることができました。県大会では最優秀賞を取ることができました。第2位となり優秀賞をいただきました。10月23日には、佐賀県で行われた農業クラブ全国大会に出場しました。これまで勉強してきたことが出題されれば入賞

できると考えていたが、難問が多く出題され、僅か得点が足りず入賞できませんでした。入賞を逃したことはとても残念ですが、精一杯勉強したことには満足しています。勉強を教えてくださった先生にはとても感謝しています。ありがとうございます。



平成20年度 松風会決算報告

(平成20年1月1日～12月31日)

一般会計		平成20年度予算額		決算額	差引額	備考
収入の部	入会金	402,000		402,000	0	3,000円×134人
	入会費	26,800		26,800	0	200円×134人
	寄付金	5,000		0	5,000	
	繰越金	130,617		130,617	0	平成20年度より
	雑収入	583		50,436	49,853	預金利息436円 パーティ券売上益金50,000円
	計	565,000		609,853	44,853	
支出の部	会議費	12,000		2,040	9,960	役員会
	財団法人松風会補助	70,000		70,000	0	(財)松風会会計へ
	旅費	220,000		175,660	44,340	関東、関西支部総会
	支部育成費	110,000		110,000	0	関東、関西、地元(松江・大田・仁摩・温泉津・江津)
	事務費	50,000		69,871	-19,871	卒業記念品・新聞広告料・通信費他
	会館管理補助	100,000		100,000	0	会館維持管理費
	予備費	3,000		0	3,000	
	計	565,000		527,571	37,429	

収入総額 ¥609,853—支出総額 ¥527,571=¥82,282(平成21年度会計へ繰越し)

平成20年12月26日

松風会監査 内田健志 長谷 豊

平成20年度 松風会年会費会計報告

(平成20年2月20日～平成20年12月31日)

収入の部		決算額	備考
会費	1,437,000		年会費2,000円×713件、納入率6.6%
繰越金	611,661		平成19年度会費繰越
計	2,048,661		
支出の部	会報発行費	1,401,776	会報松風39号、10,769部
	振込手数料	81,720	貯金局会費振込手数料
	活動補助	100,000	関東支部5万円、関西支部5万円
	計	1,583,496	

収入総額 2,048,661円—支出総額 1,583,496円=差引残高465,165円 平成21年度へ繰越しとします

平成20年12月26日

松風会監査 長谷 豊 内田健志

写真で見る
邇摩高生

郷土芸能を知る



「生活造形」の授業で温泉津町の神楽社中に来校いただき、神楽につき理解を深めました。衣装は30キロ・価格は100万円を超えるそうです。

ロードレース



10月に、男子10キロ、女子7キロ、大国地区が折返し地点で行われました。3年生の安藤君は、三連覇を達成し特別表彰を受けました。

体育祭

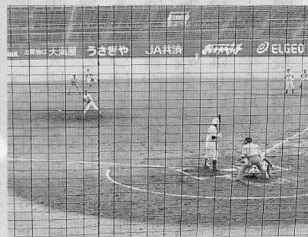


本校体育祭は観客が多く盛大です。盆明けから準備し8月下旬に実施します。保育所の園児も加わり、地域に開かれた学校といえます。

芋掘り



地域交流学習の一環として、園児と芋掘りを行いました。校舎裏の砂山で、仁摩町の2保育所から園児が来校し実施しました。

野球部
中国大会ベスト8

16年ぶりに秋季県大会に優勝し中国大会に出場しました。岡山のマスカット球場で鳥取東に勝利しベスト8になりました。

仁万の浜清掃



恒例の仁万の浜清掃を6月に行いました。仁摩小・仁摩中・邇摩高のボランティア活動として約300名が参加しました。

農業視察



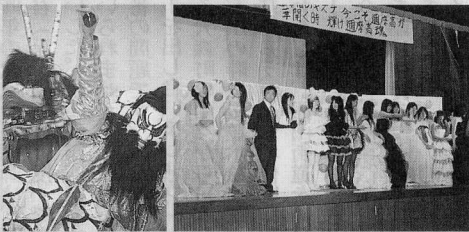
地域・環境資源系列の生徒が農家を視察しました。写真は、川本町の林業専門農家見学の様子です。

壮行式



6月に壮行式が行われました。各部の部長から、総体に臨むコメントが発表され、応援団の応援と校歌で締めくくりました。

文化祭



11月に文化祭が行われました。体育館でのアトラクションとして、温泉津神楽社中の「八岐大蛇」、出雲養護学校の「出養太鼓」、本校生徒の「ファッションショー」。教室では、2年生の系列紹介や1年生の各種展示が行われました。

ケーキコンテスト



参加は13チーム、総参加数は62名でした。最優秀賞、デコレーション賞、ファンタジー賞、期待賞、味賞の5部門で競いました。

表彰伝達



本校では、全校集会、始業式、終業式に入賞者に対し、校長が直接賞状を手渡します。生徒にとっては喜びもひとしおです。

収穫祭



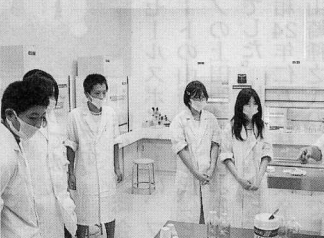
一年間の農業実習の慰労と農産物の収穫に感謝することを目的に環境系列の生徒を対象に焼肉を行いました。

防災避難訓練



中国四川省の大地震を教訓に、訓練を行いました。地震の効果音をスタートに机の下にもぐり、終息後体育館に避難しました。

中学生の一日体験入学



10月の土曜日、中学生を対象に体験入学が行われました。福祉、商業、農業等の専門科に138名の参加がありました。

出雲養護学校の見学



平成21年度、邇摩高校内に養護学校大田分室が設置されます。その事前勉強のために、7名の教員が出養を視察しました。

支部だより

関東支部

ふるさと世界遺産

原 大行 (旧姓三南行) (68)

○会社社長

○温泉津町出身、東京都在住

○昭和34年遼摩高校卒

○著書「銀の道を駆け抜ける」



♪ 袖ふりあうも他生の縁と

いにしえからの伝えとお

この世で出会う人たちは

すべて見えぬ糸でつながっている

(NHKテレビ『だんだん』より)

世界遺産『石見銀山遺跡』は私たちのふるさとだ。

世界遺産と私たちは深い縁がある。太く赤い糸の絆で結ばれているようだ。ふるさととは遠きにありて思うばかり、でも、ふるさとへの思慕は年を重ねるたびに膨らんでいくように感じます。

遼摩高校から関東地域へ、その数は千数百人と思われるが、居所が判明しているのが624名。

一昨年から昭和34年卒業組が、『松風会関東支部』の幹事長を仰せつかった。でも、私たちは目がかすれ、足腰が痛み、パワーを使い果たしてしまっている。いわゆる古希に近い年代である。「なんと

か継続しなきゃ」という熱い思いから、林皓平支部長(五十猛出身)を中心に、ところを一つにして取組み始める。

まず、松風会関東支部総会の会場を羽田や成田空港へ行くお客様が集う日本橋のシテイエターミナルの待合室を選び、収支は、進行はどのように、講師は誰を、そして、案内状の発送作業から始めた。「今日までの出席者は何名かな」気にかかる毎日だったが、結局は母校愛に燃える70名近い方々が集まってくれた。

欠席された方からの郵便振替による寄付金は助かった。本当に感謝しています。遼摩高を大切に思う同窓がこんなに沢山いるのだと意を強くした。

それにつけても支部総会出欠の返信がこない。音沙汰なしの方が、半数以上あることは残念です。せめて返信の投函だけはしてほしいと願っています。

平成19年5月の晴れた日、大田市の大田晴雄部長を講師に招いて石見銀山の由来について講演を依頼した。日本政府は、『石見銀山遺跡とその文化的景観』をユネスコ世界遺産センターへ推薦している。今までは、候補になると自然と登録される流れだった。ところが、イコモスという初めて聞く団体が「登録延期」を勧告。思いもかけない横槓が入った直後のことだった。

大田さんは「このような評価になったことは意外であり、じつに残念です。でも望みは捨てていません」と強気の発言だったけどことなく元気のいい講演会だった。やきもきしていた一ヶ月後の6月末、『ふるさとが世界遺産』に逆転登録された。その朗報を聞いた瞬間、驚きと喜びで震えがきた。「みんなの願いが叶った。さあ、大変だ。尋常なことではないよ。石見銀山が世界の舞台でスポットライトを浴びるよ。ふるさとがよみがえるぞ!」期待と不安が交錯した。

昨年の松風会の講師は、同級生の清水勲君(元茨城高専教授・理学博士)にお願いした。「世界遺産登録を喜んでばかりはいられません。これからどうするかが一番の問題です。みんなで知恵とサマネーを出し合いましょ。」と石見銀山がある大森町の山々から日本海に注がれる仁万川の畔に桜並木を植樹する「自然との共生をスライドを使いながら提唱した。わたしは、銀山街道を舞台にトレイルレースを行いながらふるさとと観光地の紹介と幼いころの思い出を綴る、『銀の道を駆け抜ける』という著書を自費出版しました。

「おおい、これがみやげだよ。」

と、石見銀山を訪れた東京の友だちは小石と椿の葉っぱを差し出した。

石見銀山遺跡へ訪れる多くの観光客にさくらや梅、タブ、椿などのポット苗木を販売し、銀山に植樹してもらう。そして、その成長ぶりを再訪して見てもらう『世界遺産記念樹』作戦を拙著の中で提案しました。それはわたしの心からの願いなのです。

いずれにしても松風会に参加し、本を書いたら、思いがけない人たちと出会い、かたい絆で結ばれました。

「伝統ある松風会だ。ささやかな会でもよい、つづけることが大事だ。温もりのある心温まる会を続けていきたい」と幹事一同は願う。でも私たちは目がかすれ足腰が痛み、パワーを使い果たしてしまっている。いわゆる古希を目前にした年代である。がんばります。

関西支部

関西支部長中田哲郎氏ご逝去

副支部長 山崎 貢 (37年卒)

昨春秋、04年より関西支部長を続けてこられた中田哲郎氏(35年卒)がご

逝去されたことを会員の皆様にお伝えし、共にご冥福をお祈りしたいと思えます。

中田支部長は、物事の方向をはっきりと示され、それに向けて突き進みリーダーで、優れた支部長でした。惜しい人を失ったことを本当に残念に思います。

このようなことがありましたが、病床にありながら、しきりに支部総会の出席予定者数を気づかい何度も電話をお入れになる方でした。自分で支部長を退くことを決めてしまい、次の支部役員体制を自分一人で決めて、松風会本部に連絡される方でした。私たちに常に元氣であるように振舞われる気丈夫な方でした。長期にわたり本当にご苦勞様でした。誠にありがとうございました。後はきちんと引き継いでいきます。

6月1日ホテル大阪ベイタワーに於いて平成20年松風会関西支部総会・懇親会を本部より原勝正会長、大島淳教頭先生の出席をいただき43名の参加の下開催しました。原会長のあいさつの中で特徴的な話は、「会報松風を松風会年会費納入者に限定して発送せざるを得なくなった。」ということでした。

ホームページにより「会報松風」を読むことはできますが、松風会と一人ひとりの会員とを結ぶ唯一の糸を数多くするために年会費の納入率を高めたいたのです。

大島教頭先生からは、総合学科高校としての遼摩高校の現状が学校要覧等に



2008年度松風会関西支部総会・懇親会

を示しながら丁寧に報告されました。クラブ活動での生き生きとした生徒の状況、就職・進学を合わせた進路の充実した状況を聞かせていただきました。ただ、20年前頃からの遼摩高校卒業生の関西への就職が殆ど無い状態が継続していることは松風会関西支部にとっては厳しいものです。

昨年の総会

のセールスポイントは、フルートの山崎たくじ氏、ピアノの上田明美氏による演奏でした。山崎たくじ氏は、昭和24年仁万農林高校卒業の山崎種之氏のご子息であり、私たちがあの演奏依頼を快く受け入れてくれました。「水を打ったように」というのは、このような状態を言うのでしょうか。シーンと静まり返った会場、それでいて聞いている人たちの表情は優しく、ゆったりとし、気持ちよさそうなのです。「素晴らしい」の一言でした。

今年の総会において新たな松風会関西支部役員体制を整え、支部活動の充実発展を目指して行こうと思えます。

事務局からの
連絡

会報松風は、遼摩高校ホームページでもご覧いただけます。

年会費の納入に御協力ください。

<http://www.shimanet.ed.jp/nima/>